〔資料紹介〕

千葉市芳賀輪遺跡出土の沈線文土器をめぐって

―鹿島川流域の縄文時代遺跡（3）―

田　中　英　世

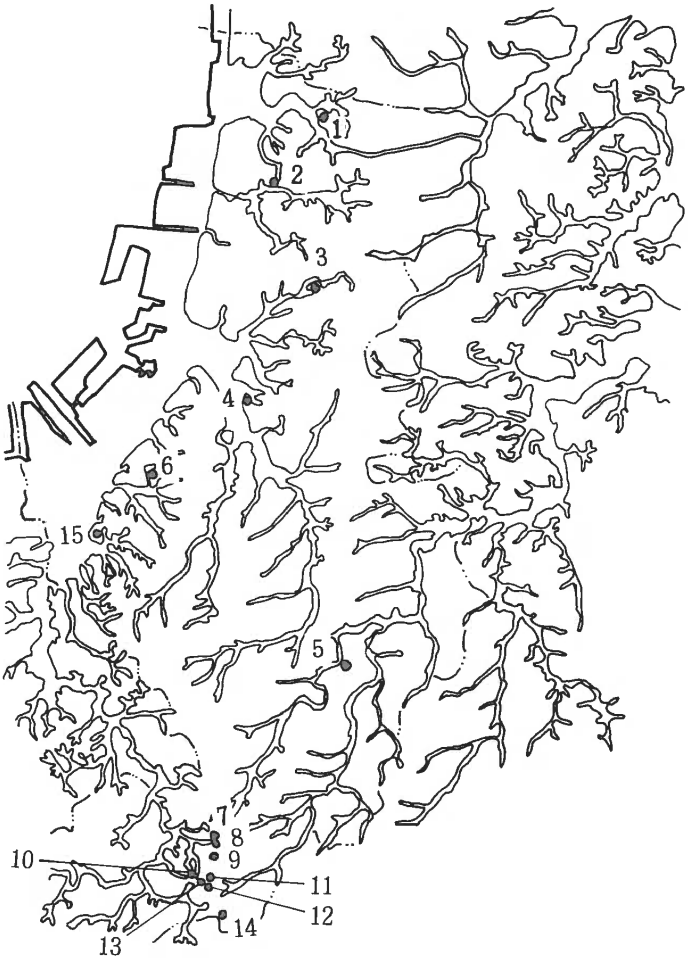
はじめに

近年、三戸式土器の細分や竹之内式土器の提唱、あるいは木の根式土器の細分など、撚糸文系土器群から沈線文系土器群に至る編年的研究が活発に行われているものの、当該資料は極めて少なく断片的なものが多い。筆者は千葉市芳賀輪遺跡において三戸式土器を伴なう炉址状遺構を調査する機会を得、その後資料の集積を行っていた。ここにそれらの資料を発表すると共に三戸式土器の研究の一端に触れてみたい。

1.　千葉市内出土の三戸式土器

千葉市内で沈線文系土器群を出土する遺跡は16遺跡を数え（第１図・第１表）、そのうち三戸式土器が検出されているのは僅か８遺跡である（文献１）。以下、各遺跡出土の三戸式土器を中心に観ていきたい。

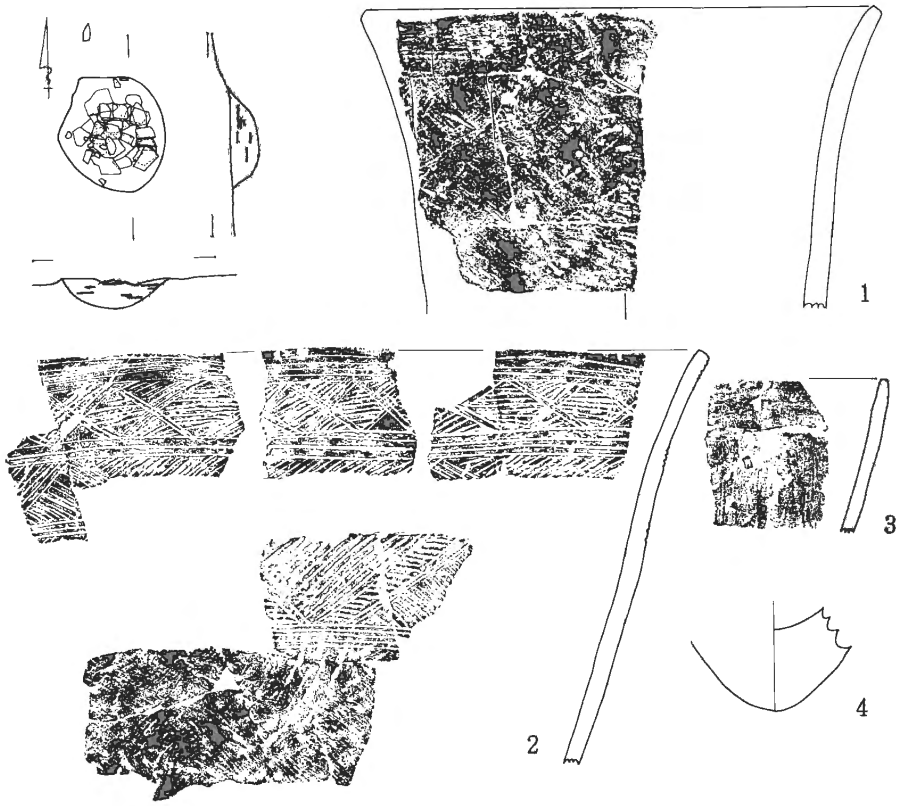
芳賀輪遺跡（第２図１～４）（文献２）―鹿島川上流の標高47ｍの台地上に立地し、縄文時代中期後半および奈良・平安時代を中心とする集落址である。縄文時代の遺構としては加曽利ＥⅡ～ＥⅢ式期の住居址25基の他、土壙も約67基検出されている。このうち三戸式土器を伴なう炉址状遺構は台地西側の鹿島川を臨む台地縁辺部の現道下より検出され、ソフトローム上面を54㎝×51㎝－15㎝の規模で掘り窪め、遺構内からは三戸式土器１個体と無文土器２個体、および土器底部が出土した。２図２の土器は口縁部が若干開き、細沈線文に区画された３段の文様帯の上段には横位又は斜位の細沈線を施した後に２本の沈線による菱形のモチーフを施文する。中段には斜行沈線を充填した鋸歯状文を配し、下段は鋸歯状文の間に横位の短沈線を充填した文様帯を狭んでいる。胴部下半は無文であるが砂粒の移動による擦痕が顕著にみられ、外面文様帯と内面は丁寧に磨かれている。１の無文土器は胎土中に含まれる砂粒の擦痕に特徴付けられる土器で、口縁部周辺は横位、以下は右下り方向の擦痕がみられる。器形・胎土・焼成及び胴部下半と内面の整形は共伴した三戸式土器と極めて近似しており共に黄褐色を呈する。３の無文土器は口縁部が丸く口縁下には横位の擦痕がみられ以下縦位の擦痕が施されている。２つの無文土器は神奈川県内原遺跡出土第Ⅱ群土器（文献３）および平坂貝塚出土例（文献４）



第１図　千葉市内における沈線文土器出土遺跡

No.	遺跡名	所在地	出土土器	備考	文献
1	後口	千葉市柏井町後口	早期中葉・諸磯b		1
2	鳥喰台	千葉市宮野木町鳥喰台	稲荷台・三戸・野島・茅山下層・茅山上層・諸磯・浮島・加曽利EⅡ・掘之内・加曽利B・千網	早期後半の炉穴 150基 千葉市史資料編では「鳥込東遺跡」	1
3	餅ケ崎	千葉市源町餅ケ崎	井草・夏島・三戸・鵜ケ島台・茅山・阿玉台・加曽利EⅡ・Ⅲ・Ⅳ・称名寺・掘之内・加曽利B・安行Ⅰ	中期後半から後期前半の住居址80軒	5
4	向ノ台	千葉市都町向ノ台	田戸上層・子母口・茅山・諸磯		1
5	芳賀輪	千葉市野呂町ハガワ	井草・夏島・三戸・茅山上層・黒浜・加曽利EⅡ・Ⅲ・掘之内・加曽利B・安行Ⅰ	中期後半の住居址27軒	2
6	西ノ花	千葉市大森町西ノ花	井草・夏島・田戸下層・茅山上層		1
7	北河原坂第2	千葉市小食土町	田戸下層・茅山・関山		6
8	南河原坂第1	千葉市小食土町	三戸・茅山・関山		6
9	南河原坂第5	千葉市小食土町	三戸・関山・黒浜・諸磯a・b・浮島Ⅲ・興津・下小野	三戸式期住居址、前期住居址	6
10	坂ノ越	千葉市小食土町	三戸・野島・茅山		6
11	文六第1	千葉市大椎町	稲荷台・三戸・鵜ケ島台・茅山・諸磯・浮島・加曽利E		6
12	文六第2	千葉市大椎町	井草・野島・三戸・鵜ケ島・茅山・諸磯・浮島・阿玉台		6
13	大椎第2	千葉市大椎町	田戸下層・茅山・関山		6
14	住吉	千葉市小山町	田戸下層・田戸上層・茅山・花積下層・関山・加曽利B		
15	峠ノ台	千葉市南生実町	田戸上層・掘之内・加曽利B		51

第１表　千葉市内における沈線文土器出土遺跡一覧表



第２図　芳賀輪遺跡出土土器

に類例が求められる。４は１か２の底部で器肉が厚く、角度は鈍い。遺構内より三戸式土器と無文土器が共伴した例は他に無く、極めて重要な資料である。なお遺構内壁は弱い焼成を受けている。遺跡の概略については既に概報において詳しく触れられている。

餅ケ崎遺跡（第３図１・２）（文献５）―葭川の支流により形成された標高25*m*の舌状台地上に立地する縄文時代中期後半から後期前半を中心とする集落址で、住居址約80軒が検出されており、早期の井草式に伴なう住居址も１軒発見されている。三戸式土器はグリッドからの単独出土で２個体みられる。第３図１は若干外反する口縁部を有し、２本～３本の横位沈線に区画された３段の文様帯に配された鋸歯状の基本モチーフ内に長線と短線を交互に文様を描出するもので、胴部以下は無文帯をなし胎土中に極めて多量の石英を含むが内面及び胴部上半は良く磨かれている。２も１と同じモチーフを有する。

南河原坂第５遺跡（第３図３～17）（文献６）―鹿島川と村田川の分水嶺をなす標高90*m*の丘陵上に立地し、遺跡は村田川の支谷に面する。縄文時代早期中葉から前期前半を中心とする集落址である。第３図３～13は餅ケ崎遺跡・芳賀輪遺跡と同類の細沈線により区画された横位文様帯内に鋸歯状文・格子目文を配した土器で、平作りの口縁部の他に内削ぎを特徴とする土

器もみられる（８・９）。14～15は平行沈線のみの土器で、14には縦の刻目がみられる。無文土器は数個体の出土がみられるが、16は芳賀輪遺跡出土の無文土器と同じ口縁部が外反する土器で、口縁部は横位、胴部は右下り方向の擦痕が顕著にみられる。17は口縁部が丸くなる土器で縦方向の擦痕がみられ、三戸式土器に先行する無文土器の可能性が考えられる。まだ整理中で沈線文土器と無文土器の共伴関係は不明であるが、遺構も検出されているようで今後の整理・発表が待たれる。

文六第１遺跡（文献６）―村田川に面する標高94mの丘陵上に立地し、縄文時代早期前半から前期前半を中心とする集落址で、現在も発掘調査中である。資料を実見した限りでは他の遺跡出土の横位文様帯を特徴とする土器は少なく、細い沈線により器面全面に格子目文を構成する土器が主体を占めるようである。

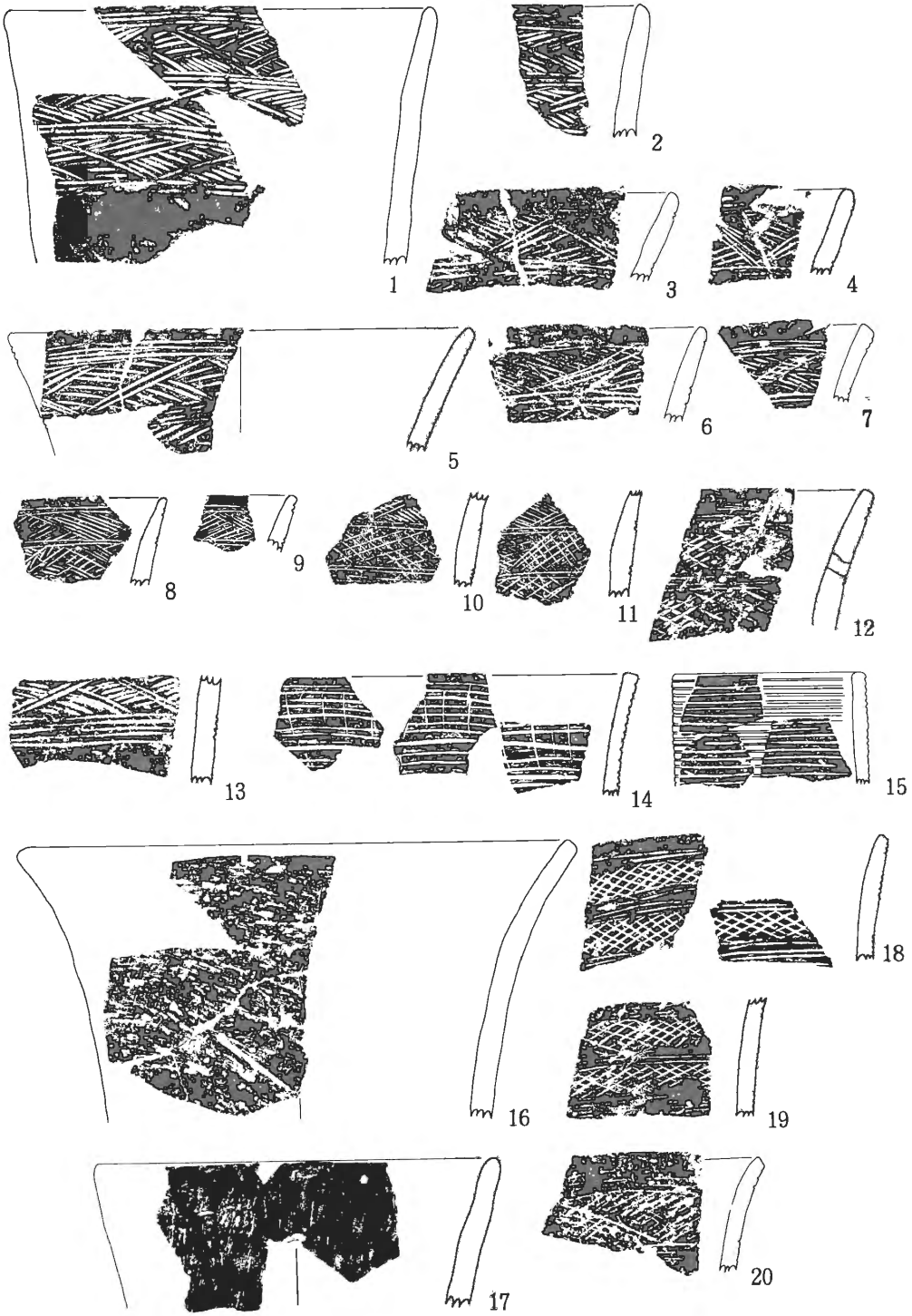
文六第２遺跡（第３図18～20）（文献６）―文六第１遺跡の南側の尾根上に立地する。細沈線文による区画内に鋸歯状文・格子目文を配する土器が無文土器と共に出土している。

以上が千葉市内出土の三戸式土器の概要である。この他に鳥喰台遺跡（註２）・南河原坂第１遺跡からの出土も知られるが、他の沈線文系土器群を出土する遺跡をふくめても、千葉市の南側の土気地区に集中する傾向がみられる。

2. 三戸式土器について

赤星直忠氏の神奈川県三戸遺跡の調査（文献７）によって設定された三戸式土器は、設定当初より田戸下層式土器とほぼ同様な施文具により近似した文様を描出する事が指摘されており（文献８）、三戸式土器を田戸下層式土器のカテゴリーの中で把握しようとする方向（文献９）がある一方、三戸式土器の中に時間差・地域差を求める方向が近年みられる（文献10）。千葉県舟塚原古墳封土出土の土器を分析した西川博孝氏は、三戸式土器を三戸類・舟塚類・稲荷原類に分類し、三戸類を古く舟塚類・稲荷原類を新しく位置付けた（文献11）。これに対して岡本勇氏は標式遺跡である三戸遺跡の資料を提示するとともに、神奈川県荻野遺跡・内原遺跡の発掘成果をふまえ稲荷原型三戸式土器を三戸式土器に先行する土器として捉え（文献12）、これを受けて馬目順一氏は福島県竹之内遺跡において稲荷原型三戸式土器を三戸式・大平式土器に先行する土器として「竹之内式土器」と命名し、帯状施文の山形押型文土器と擦痕を特徴とする無文土器がセットをなすとした（文献13）。以上のように近年の三戸式土器の研究は三戸式土器の細分、特に稲荷原型三戸式土器の位置付けをめぐって展開されており、撚糸文系土器群の終末に設定された沈線文を有する「木の根式土器」との関係と共に現在重要な問題となっている（文献14）。

今回紹介した千葉市内出土の三戸式土器はその大部分が稲荷原型三戸式土器とされるものである。稲荷原型三戸式土器を出土する遺跡としては下記の遺跡が知られている。



第３図　千葉市内出土の三戸式土器

福 島 県：竹之内遺跡（文献13）

茨 城 県：十万原遺跡（文献９）・大沼遺跡（文献15）・伏見遺跡（文献16）・西谷Ａ遺跡（文献17）

栃 木 県：大谷寺洞穴遺跡（文献18）・坂田遺跡（文献19）

埼 玉 県：大原遺跡（文献20）・稲荷原遺跡（文献21）・大古里遺跡（文献22）・西大宮バイパス№２遺跡（文献23）・鶴巻遺跡（文献24）・大北遺跡（文献25）

東 京 都：はけうえ遺跡（文献26）・嘉留田遺跡（文献27）

神奈川県：山居遺跡（文献28）・内原遺跡（文献３）・鴨居上ノ台遺跡（文献29）・荻野台遺跡（文献30）

千 葉 県：本郷遺跡（文献31）・日秀西遺跡（文献32）・桐ケ谷新田遺跡（文献33）・高根北遺跡（文献34）・鶴塚遺跡（文献35）・新東京国際空港№７遺跡（文献36）・西之城貝塚（文献37）・池上りＩ遺跡（文献38）・今郡カチ内遺跡（文献39）

長 野 県：浪人塚下遺跡（文献40）

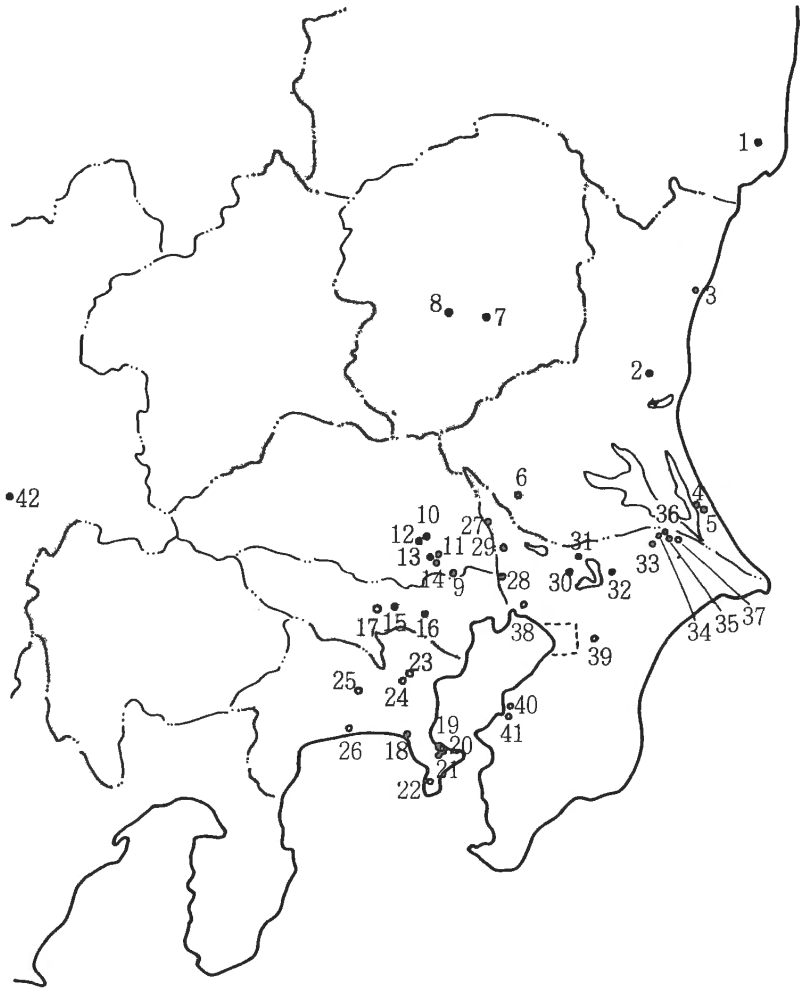
これらは、いずれも断片的な資料で、器形や文様構成や共伴する土器が知り得るのは竹之内遺跡・伏見遺跡・稲荷原遺跡や今回紹介した餅ケ崎遺跡・芳賀輪遺跡出土例に限られている。器形は内彎気味にゆるく立ち上りながら胴部上半から外反するのが一般的であるが、餅ケ崎遺跡出土例のように直線的に口縁に至るものもみられる。口唇部は外側に向けて平作りされているのがほとんどであるが、今回紹介した資料の中には外側が削られたもの（第３図３）や内側が削られているもの（第３図８・９）が一部にみられる。底部は芳賀輪遺跡出土例のように比較的厚い尖底を有すると思われる。文様は横位の２～３本の細沈線により３～５段に区画された中に格子目文や鋸歯状文を充塡するもので、文様構成にいくつかのモチーフがみられる。

Ｉ類　充塡鋸歯状文とも呼ぶべき文様で数種類みられる。

Ａ類―芳賀輪遺跡出土例の中段に施文されている文様で、鋸歯状文内に逆方向の斜行沈線を充塡する。類例は少なく、今回紹介した南河原坂第５遺跡出土の口縁部に１部みられるようである（第３図８・９）が、池上りＩ遺跡・西谷Ａ遺跡・伏見遺跡出土例中に類例がある。

Ｂ類―芳賀輪遺跡出土例の下段に施文されている文様で、Ａ類の鋸歯状間に横位の沈線文を充塡した梯子状文とも呼ばれる文様帯を狭んでいる。伏見遺跡・西之城貝塚出土例中に類例がみられる。

Ｃ類―餅ケ崎遺跡・竹之内遺跡出土例に代表される文様で、鋸歯状文内に長線と短線で複雑な文様を抽出するものであるが、比較的類例が多くみられる。伏見遺跡・大北遺跡・はけうえ遺跡・山居遺跡・鴨居上ノ台遺跡等の文様構成が判別可能な出土例の他に断片的資料の出土例も多い。



第４図　三戸式土器出土の主要遺跡

第　2　表

1	福　島	竹之内遺跡	15	東　京	はけうえ遺跡	29	千　葉	桐ケ谷新田遺跡
2	茨　城	十万原遺跡	16		嘉留田遺跡	30		高根北遺跡
3		大沼遺跡	17		タマニュータウンNo.207 遺跡	31		鶴塚遺跡
4		伏見遺跡	18	神奈川	山居遺跡	32		新東京国際空港No.７遺跡
5		西谷Ａ遺跡	19		内原遺跡	33		西之城貝塚
6		奥山下根遺跡	20		鴨居上ノ台遺跡	34		池上りＩ遺跡
7	栃　木	大谷寺洞穴遺跡	21		荻野台遺跡	35		今郡カチ内遺跡
8		坂田遺跡	22		三戸遺跡	36		神田台遺跡
9	埼　玉	大原遺跡	23		東方第13遺跡	37		舟塚原遺跡
10		稲荷原遺跡	24		荏田第10遺跡	38		西の台遺跡
11		大古里遺跡	25		鳶尾遺跡	39		山田水呑遺跡
12		西大宮バイパスNo.２遺跡	26		向原遺跡	40		笹子込山遺跡
13		鶴巻遺跡	27	千　葉	本郷遺跡	41		清水谷遺跡
14		大北遺跡	28		日秀西遺跡	42	長　野	浪人塚下遺跡

Ⅱ類　重層山形文と呼ばれる文様で伏見遺跡出土例がみられるのみである。

Ⅲ類　格子目文で比較的多く用いられる。伏見遺跡出土例のように格子目文の単一モチーフで構成されるものや、竹之内遺跡、はけうえ遺跡のように他のモチーフと組み合わされる例がみられる。十万原遺跡・西ノ作A遺跡・大谷寺洞穴遺跡・坂田遺跡・大原遺跡・稲荷原遺跡・西大宮バイパス№２遺跡・嘉留田遺跡・荻野台遺跡・鶴塚遺跡・新東京国際空港№７遺跡の他、今回紹介した南河原坂第５遺跡・文六第２遺跡と類例は多い。

Ⅳ類　単一方向の斜沈線を充塡するもので、内原遺跡出土例のように上下に方向が反対のものを重ねて綾杉状を呈するものや、浪人塚遺跡出土例のようにⅢ類の格子目文と組み合わさる例、今郡カチ内遺跡や伏見遺跡のようにＩ－Ａ類の鋸歯状文と組み合わさる例もある。

Ｖ類　芳賀輪遺跡出土例の上段に施された文様で、横位の不定方向の細沈線を施した後に２本の斜沈線により菱形のモチーフを構成する。桐ケ谷新田遺跡出土例中にも一部みられる。

以上、稲荷原型三戸式土器に用いられる文様の基本モチーフを５類に分類した。Ｉ類の充塡鋸歯状文の最も単純なモチーフであるＩ－Ａ類は、西日本に分布する押型文土器の中にみられる複合鋸歯文（文献41）や中部地方に分布する異形押型文と称される土器の中に類似モチーフがみられる他（文献42）、田戸下層式土器でも口縁部文様の重要な要素となっている（註３）。

しかし、ここでは近年調査された池上りＩ遺跡出土例に注目したい。池上りＩ遺跡出土例中の器形が推測可能な土器の中段と下段にはＩ－Ａ類の文様に混じって、単一方向の斜沈線中に逆方向の斜沈線を１本加えることにより鋸歯状文を形成する手法がみられる。Ｉ－Ａ類の文様の成立を考える上で極めて重要である。Ｉ－Ｂ類は比較的類例は少ないものの、伏見遺跡第３群土器Ｃ種の横位沈線を充塡した梯子状文同様日計型押型文土器の影響が指摘できる（文献43）。Ｉ－Ｃ類のモチーフは比較的多様されるものであるが、その祖型はまだ不明であり、Ｖ類とするモチーフからの変化が読みとれるが今後の検討に待ちたい。Ⅲ類とした格子目文も比較的多用され広く分布する他、Ｉ－Ｃ類との組み合わせで用いられる例が多い。先行する木の根遺跡出土例の中に縦位区画ではあるが安定した格子目文が既にみられ（文献14）、また稲荷原型三戸式土器に後続すると思われる龍角寺ニュータウン遺跡№３地点からは口縁部に刻目を持ち、刺突文と組み合わさって格子目文が施された土器が出土している（文献44）。Ｖ類の文様の類例はほとんどみられないが、日計型押型文土器にみられる横線x字状文のモチーフと類似する（文献45）。

これらの土器にともなうものとして岡本勇・馬目順一両氏により指摘された擦痕文土器ともよぶべき無文土器があげられる。三戸式土器に擦痕を有する無文土器が伴なうことは多くの研究者により指摘されているが良好な資料は極めて少ない。芳賀輪遺跡の炉址状遺構より稲荷原型三戸式土器に共伴した無文土器の大形破片は、胎土中に粗い砂粒を含み、成形時の移動による擦痕が口縁では横方向に、以下は右下り方向にみられる特徴的な土器である。器形・胎土・焼

成・成形は共伴した三戸式土器に極めて近似している。同様な無文土器は南河原坂第５遺跡・高根北遺跡・伏見遺跡・荻野台遺跡からも出土しており、内原遺跡では第Ⅱ群第３類土器とされ口唇部の尖がる無文土器（第２類土器）とⅡ－Ａ類とⅣ類のモチーフの沈線文土器（第４類土器）および山形押型文・平行線押型文土器が伴出している。内原遺跡出土第Ⅱ群第４類土器についての「（第４類土器は）胎土・色調・器面整形等を第３類土器に酷似させ、第３類土器をキャンバスとして沈線文が描かれていると言っても差し支えないと思われる土器である。」（文献５）との指摘は芳賀輪遺跡出土の沈線文土器と無文土器にもあてはまり、同様な指摘が竹之内遺跡においてもなされている。内原遺跡第Ⅱ群第２類土器および第３類土器は平坂式土器として把握されるものとしているが、千葉県内にあっては無文土器の様相がまだ未解明で、平坂式土器の再検討も指摘されており（文献46）、今は資料の提示にとどめておきたい（註４）。

最後に芳賀輪遺跡において発見された炉址状遺構について触れておきたい。三戸式土器に伴なう遺構としては向原遺跡から発見された土壙８基と集石土壙３基（文献47）、および鳶尾遺跡から発見された炉穴１基（文献48）のみである。このうち明確に捉えられるものは向原遺跡第17号集石土壙と鳶尾遺跡の２例のみで、芳賀輪遺跡を加えても僅か３例である。新東京国際空港№67遺跡からは住居址11軒が検出されており（文献49）、南河原坂第５遺跡においても住居址が検出されているが炉は伴なわないようである。田戸下層式期においても炉が屋外から検出されている例が多く、上記３例は現時点では屋外炉として捉えておきたい。

お　わ　り　に

近年注目されている稲荷原型三戸式土器について千葉市内出土資料を中心として述べてきた。文様モチーフについては前述したように押型文土器、特に東北地方の日計型押型文土器の影響が指摘できるが、今後は先行する木の根遺跡出土の沈線文土器との関係や共伴する無文土器の様相が解明されなければならない。三戸式土器でも帯状格子目文を有する土器も近年の今郡カチ内遺跡・西の台遺跡・荏田遺跡・多摩ニュータウン№207遺跡のように文様構成を捉えることが可能な資料が増え、岩手県大新町遺跡出土の沈線文土器との強い関係が指摘できるが、貝殻条痕文を主要文様とする土器との関係を含めて、今後資料の集積を行なった後に稿を改めて述べてみたい（註５）

今回用いた資料はいずれも千葉市教育委員会および財団法人千葉市文化財調査協会により発掘調査が行われ、現在整理中のものである。発表に際しては、馬目順一・久保脇美朗・原田昌幸・朝比奈竹男の各氏には芳賀輪遺跡出土資料を実見して頂き、高麗正・飯塚博和・野内秀明の各氏には類例等について種々の御教示を賜り、佐藤順一・横田正美・寺門義範・山下亮介の各氏には資料の探索等に協力を得た。記して感謝申し上げる次第である。

なお本稿においての類例等については報告書等の拓本および実測図に依っており、特に無文土器については土器を実見していない為に認識の誤りがあることと思われるが、今後資料の補足と共に適宜訂正してゆきたい。

（財）千葉市文化財調査協会

＜脚註＞

1　遺構周辺は若干踏み固められているようだが、精査による柱穴の発見もみられず炉址状遺構として捉えておく。

2　「千葉市史　資料編１　原始・古代・中世」では『鳥込東遺跡―小中台町字鳥込所在―』と記載されているが、ここでは周辺の鳥込東貝塚との混同を避ける為にも「千葉市埋蔵文化財分布地図＜改訂版＞」記載の『鳥喰台遺跡』を用いた。

3　鴨居上ノ台遺跡・伏見遺跡出土の田戸下層式土器にみられる他、岩手県大新町遺跡でも日計型押型文土器に後続する沈線文土器に一部みられる。

4　千葉県内で三戸式土器に伴なう無文土器の良好な資料としては清水谷遺跡・池上りⅠ遺跡・今郡カチ内遺跡出土の土器があげられる。このうち擦痕を特徴とする無文土器は池上りⅠ遺跡出土第Ⅲ類１ａ土器、今郡カチ内遺跡出土第Ⅱ群第２類土器で、芳賀輪遺跡・南河原坂第５遺跡出土例と関連するのは後者であるが口縁の外反がみられず「神奈川県平坂貝塚出土の平坂式とは、焼成が一般的に良好で、器質は脆弱でないこと、器面調整にともなう擦痕方向がほぼ一定であることなどの相違点があるので、これと区別して考えるべきであろう。」との指摘がある。西川氏による三戸類を三戸式土器の古い部分に考えた場合、芳賀輪遺跡・南河原坂第５遺跡出土の無文土器の系譜をどこに求めればよいのであろうか。

5　帯状格子目文のモチーフ中に日計型押型文土器のモチーフが受け継がれているとの指摘がある。特に千葉県西ノ台遺跡では今郡カチ内遺跡出土の日計型押型文土器の文様構成に類似した帯状格子目文を有する土器が出土している（文献50）。

＜引用・参考文献＞

1　千葉市教育委員会　「千葉市埋蔵文化財分布地図＜改訂版＞」　1984

2　青沼道文　「千葉市源町餅ケ崎発掘調査予報」　1980　千葉市教育委員会

3　大塚真弘・野内秀明　「長井町内原遺跡」　1982　内原遺跡調査団

4　岡本　勇　「相模・平坂貝塚」『駿台史学』第３号　1956

5　青沼道文・田中英世　「千葉市芳賀輪遺跡－第２・７次発掘調査概報－」　1984　千葉市教育委員会

6　武田宗久・寺門義範他　「土気駅南地区の遺跡」　千葉市土気地区遺跡調査会

7　赤星直忠　「相模三戸遺跡」『考古学雑誌』第19巻11号　1929

赤星直忠　「古式土器としての三戸式土器に就いて」『考古学』第７巻９号　1936
8　赤星直忠　「横須賀市田戸先史時代遺跡調査」『史前学雑誌』第７巻６号　1935
佐々木藤雄他　「向原遺跡ー第１分冊ー」　1982　神奈川県教育委員会
9　進藤敏一他　「水戸市十万原遺跡発見の縄文早期沈線文系土器」『常総台地』第６号　1972
10　石川日出志　「縄文式土器」『山田水呑遺跡』　1977
11　西川博孝　「三戸式土器の研究」『古代探叢』　1980
領塚正浩　「三戸式土器の検討ー神奈川県三浦市三戸遺跡採集資料を中心としてー」　唐沢考古５　1985
12　神奈川県民部県史編集室　「神奈川県史　資料編20　考古資料」　1979
岡本　勇　「縄文土器大成Ⅰ　早・前期」　1982
13　馬目順一　吉田生哉　「竹之内遺跡」　1982　いわき市教育委員会
14　池田大助　「北総台地における沈線文土器群の出現」『千葉県文化財センター研究紀要』８　1984
15　川崎志郎他　「日立市大沼遺跡発掘調査報告書」　1977　日立市教育委員会
16　小野真一他　「常陸伏見」　1979　伏見遺跡調査会
17　田口崇他　「萩原内遺跡・西谷Ａ遺跡」　1981　鹿島町考古学資料刊行会
18　塙静夫他　「宇都宮市史　第１巻原始・古代編」　1979　宇都宮市史編さん委員会
19　大和久震平・塙静夫　「栃木県の考古学」　1972
20　吉田格　「埼玉県大原遺跡調査報告」『古代文化』第12巻２号　1941
21　三友国五郎・安岡路洋　「稲荷原」　1966　大宮市教育委員会
22　高野博光・津田進　「大古里遺跡発掘調査報告書」　1976　大古里遺跡調査団
23　立木新一郎・森下晶市郎　「西大宮バイパス№１・№２遺跡」1985　大宮市遺跡調査会
24　埼玉県　「新編埼玉県史　資料編１」　1980
25　青木義脩他　「大北遺跡・井沼方遺跡発掘調査報告書」　1981　浦和市遺跡調査会
26　吉田格・小田静夫　「はけうえ」　1980　国際基督教大学考古学研究センター
27　十菱駿武他　「嘉留多遺跡Ⅱ」　1985　世田谷区教育委員会
28　三上次男他　「鎌倉市大船山居遺跡発掘調査報告」『鎌倉市文化財資料』第６号　1967
29　山田昌久他　「鴨居上の台遺跡」　1981　上の台遺跡調査団
30　宇内正城　「横須賀市荻ノ台Ｄ遺跡の遺物」『横須賀考古学会年報』№24・25　1982
31　下津谷達男・飯塚博和　「本郷遺跡発掘調査報告書」　1980　野田市本郷遺跡調査団
32　清藤順一他　「千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書」　1980　千葉県文化財センター

ンター
33　川根正教・朝比奈竹男　「桐ケ谷新田遺跡」　1979　桐ケ谷新田遺跡調査会
34　中山吉秀・古内茂　「高根北遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅳ』　1975
35　鷹野光行　「鶴塚遺跡出土の縄文式土器」『古代』第58号　1974
36　西山太郎・西川博孝他　「新東京国際空港　埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ―No.7遺跡―」　1984　千葉県文化財センター
37　西村正衛　「千葉県香取郡神崎町西ノ城遺跡―第2次発掘調査概報―」『古代』第45・46号　1965
38　小林清隆　「池上りⅠ遺跡」『主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅宅地関連事業）地内埋蔵文化財発掘調査報告書』　1985　千葉県文化財センター
39　小宮　孟　「今郡カチ内遺跡」『東総用水』　1984　千葉県文化財センター
40　宮坂光昭　「浪人塚下遺跡」　1975　下諏訪町教育委員会
41　岡本東三　「縄文時代Ⅰ（早期・前期）」『日本の美術』第189号　1984
42　桑月　鮮　「東北地方の押型文土器」『長野県考古学会誌』第41号　1981
43　笠原信男　「撚糸文系土器との対話」『土曜考古』第8集　1984
44　柿沼修平・村山好文　「龍角寺ニュータウン遺跡群」　1982　龍角寺ニュータウン遺跡群調査会
45　八木光則他　「大館町遺跡群―大新町遺跡―」　1983　盛岡市教育委員会
46　石井則孝・堀越正行　「木更津市笹子込遺跡の研究―縄文時代早期三戸式土器をめぐって」『史館』第2号　1974
47　佐々木藤雄他　「向原遺跡―第1分冊―」　1982　神奈川県教育委員会
48　鈴木保彦他　「鳶尾遺跡」　1975　神奈川県教育委員会
49　千葉県文化財センター　「千葉県文化財センター年報7」　1981
50　高野博光他　「西の台（第2次）―船橋市西の台遺跡調査報告書―」　1985　西の台遺跡調査会
51　千葉市史編纂委員会　「千葉市史　史料編1」　1976